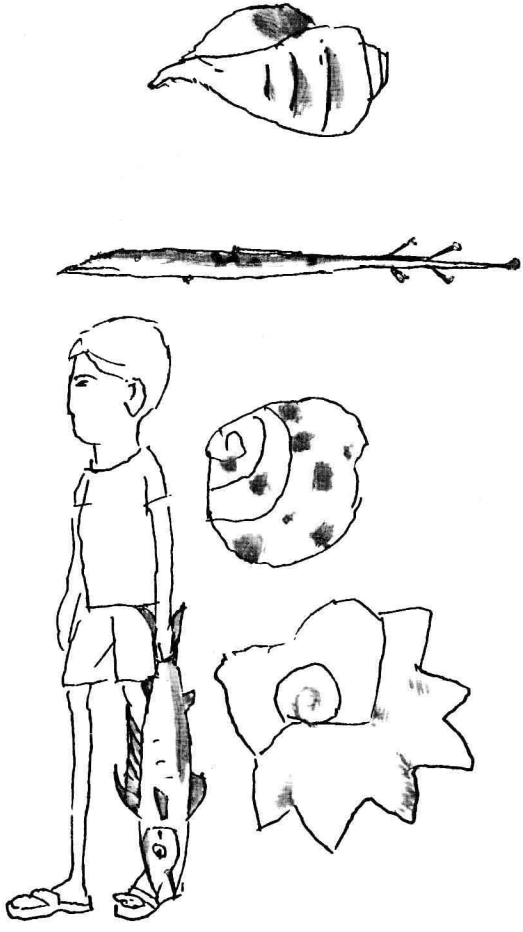
国土社の創作児童文学 7

火の海の貝

久保 喬作・鈴木義治 絵

火の海の貝

久保　喬 作・鈴木義治 絵



913

久保　喬
火の海の貝
国土社　1973
174P　21cm（国土社の創作児童文学⑦）

基本カード記載例

火の海の貝

国土社の創作児童文学⑦

初版印刷　一九七三年　六月　五日
初版発行　一九七三年　六月十五日

著　者　久保（くぼ）　喬（たかし）
発行者　長宗泰造

印刷所　株式会社厚徳社
発行所　株式会社国土社

112　東京都文京区目白台一―一七―六
電話（九四三）三七二一
振替　東京　九〇六三一

落丁・乱丁はおとりかえします　〈検印廃止〉

■もくじ　火の海の貝

貝の顔　2

カンバスと貝　16

漁師の声　26

白い火のサンゴ　38

みんなの貝の家　56

北の貝たち　63

この火の貝　78

原始の海で　86

海を殺すな　108

さいごの生きもの　116

未来の鳥　126

サンゴあみのうた　134

あすの海で　152

火の海の貝

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

貝の顔

明の父は、浜の人たちから、いつも「貝きちがいの綱屋さん」と、いわれている。たしかに父はあだ名のとおり貝きちがいだと明も思う。

明がまだ小さいころから、家の中はどこもかも貝だらけだった。父の居間も、座敷も、茶の間も、廊下も、土間も、大小さまざまの形の巻貝や二枚貝、白、赤、黄、みどり、むらさきなど、色とりどりの光をおびた貝がらが、はだかのままのや、標本箱や、ボール箱、大きな木箱に入れたものまでぎっしりならんでつみあげられて、

「そうだな、数ははっきりしないが、もう一万何千個になるかなあ」

と、父はいう。

表の綱屋の店のほうは、家業の船具や漁具などがならんでいるが、おくへはいると、

すっかり貝の家だった。
標本にするまえのなまの貝などもあるので、家の中は潮くさいにおいがいつもただよっている。
明がそこいらにある貝ひとつにでも手をふれると、すぐに、どなりつけられる。
「二十年かかってあつめた貝じゃ。これだけあっても、いらんものはひとつもない」
ある日、明が廊下にいると、父の居間から話し声が聞こえてきた。お客はだれもいないのにと、のぞいてみると、部屋の中には父だけがすわっている。ひざの前に、いろいろな貝をならべて、そのひとつを手に持って、何かぶつぶつひとりごとをいっていた。
――おや、おとうさんは貝としゃべり合っている。貝と話をしているな――
明はなんだかぶきみな気がした。
でも、その明も、四、五人の友だちと、浜へいって遊んでいたとき、砂の中に、きれいな白い巻貝がひとつ落ちているのを見た。どこにでもある、めずらしくはない貝だったが、定男という子が、どろだらけのきたないくつで、その貝の上を平気でふもうとしたので、

「こら、ふむなっ」
と、明はどなった。すると、定男が、
「ふん、こんなもの」
足をひかずに、わざと、ふみつけようとする。明は定男をつきとばした。よろめいた定男はこぶしをあげて、明の顔をぶった。ふたりはとっくみ合いになったが、ほかの子たちにひきはなされた。
「なんじゃ、おまえも貝きちがいか、おやじの子じゃ」
と、定男があざけるようにいった。
明はぶたれたひたいのこぶをさすりながら、貝を持って家へ帰った。
だが、そんなことはあっても、明はまだ父のようにそれほど貝がすきとはいえない。家じゅうのたくさんの貝の中には、きらいな貝などもある。
小さいときから、なんだかこわい、あやしい貝だと思っているのは鬼の貝。
それは大きなサザエのような巻貝だが、からだじゅうに、長いツノのようなとがったトゲがならんでつき出ている。ひらいた口の下には長いくだがあるが、そのまわりもトゲだらけで、ひと目見てだれでも思う鬼の顔。ほんとうの名も「悪鬼貝」という

のだった。

もう五、六年前の夏、ある夜ふけに、「めずらしい貝をとった」そういって、松おじという年よりの漁師がそれを持ってきた。よろこんだ父はお礼の金を渡して、ごちそうをした。酒がまわると、松おじは話しだした。

「これはわしよりほかの者はだれもいかん、びょうぶの岩場でとってきたんじゃ」

岬の北のがけ下の海中に、びょうぶのように大岩がならんでいる。風のある日、このあたりに吹きよせられ、暗礁に乗りあげた船が多い。漁船もここであみを入れると、底岩にひっかかって破れてしまう。一本づりの漁師たちも、魔所だといってよりつかない。

「夜ふけに、あのあたりへいくとな、波の中から、一そうの小舟がくる。その小舟には、人間のすがたはひとりも見えんのじゃ。その舟に出あった者は、きっと海にひきこまれる」

父のそばにすわっていたおさない明に聞かせるように、松おじはそんな話もしてくれた。

「うん、むかし、あらしのときに難船した漁師の舟を、仲間の舟がたすけないで見ご

ろしにした。それで、その舟の漁師が海の底で鬼になって、いつまでもほかの舟をうらんでいるのじゃ」

そういう魔所へも松おじだけは、もぐりにいって、タコをついたり、アワビをとったりするという。

「大岩の根に深いほら穴がある。そこへはいると、えものが多いが、めったなやつがもぐっていくと、岩にからだをはさまれて出られなくなる。それに、ぬしに会うかもしれん」

「ぬしって？」

「うん、むかしからその穴のおくには、まっ白な大ガメがおるというのじゃ――」

松おじのそんな話も聞いたので、悪鬼貝はよけいにあやしい形の貝のように見えた。その貝を綿にのせておいてある、部屋の中の床の間のうす暗いあたりを見るのも、明はぶきみなような気がした。

「悪鬼貝はえんぎがわるい。魔をよぶ貝だそうですね。あの貝だけはどこかへやってしまえばええのに」

と、母がまゆをしかめていっても、父は相手にしなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「いや、この貝は、外国では美しい海の女神が、かみの毛をすくクシにつかう貝だといわれているそうじゃ」

そう聞かされると、その鬼の貝のトゲの顔がふっと変わって、青い海のアワから生まれた、はだかのままの美しい女神が、ホタテ貝の上にすらりと立っている。その金色にかがやく長いかみの毛を、貝のクシですいているまっ白な手も見えてくるが、それも、やっぱりおばけ貝のゆめのようで、

——同じ貝でも、見る者の心によって、いろいろちがって見えるんだな——

と、明は思う。

いく日も雨がじとじとつづいたのち、からっと青く晴れた日の朝のこと。家じゅうのまどの戸をみんなあけて、光がいっぱいさしこんできた。いつもは暗い床の間のあたりも、けさは見ちがえるように明るい。明は、ふと、そこの箱にならんでいる貝を見て、はっとした。

赤、青、黄、みどり、もも色など、さまざまの貝の色や、もようのあざやかさ、はだの光のつややかさ、——見なれた貝が、どれもみな、まるで初めて見るような新し

さで、

——おや、こんな貝があったのか——

明は思わず、そのひとつへ手をのばした。

るり色にすきとおった、うすいガラスのような美しい巻貝。

「うん、きれいだろう」

と、いう声に、明はびくっとしてふりむく。だが、うしろにきている父は、いつものように貝にちょっとさわってもしかりつける父ではなくて、しずかな声で、

「その貝はな、みかけはそんなにやさしいが冒険ずきの浮き貝じゃ」

「浮き貝って？」

「うん、海の上で、口からシャボン玉のような、アワをいっぱいふきだして、その上に浮きながら、ぷかりぷかり、黒潮に乗って何百マイルも旅行をするんじゃ」

「ふうん——」

父が、明に、貝のことをこんなに話してくれるのは初めてだった。

「そのむこうのは、月日貝——」

まるい平たい二枚貝で、いっぽうの貝がらは月のようにただまっ白で、もういっぽ

うは赤い太陽の色。

「ひとつの貝が、月と日にわかれているのはおもしろいな。その横のは、天女のカンムリ――」

白とうすみどりの巻貝。からの上いちめんに、たくさんのしまのもようがあざやかに浮き出ていて、てっぺんは三段にかさなった塔の形と、それをかこむさまざまの波の起伏も、いかにもこまかにきざまれた彫刻のように見える。

「ほんとうに天女の頭のかざりのようじゃ。こんなみごとなものを、いったいだれが作ったのだろうか。見ていると、ふしぎな気がする――」

と、父はいう。

べつのガラスの箱の中では、色ももようもいろいろちがう、たくさんのタカラ貝が、星くずのむれのように光っていた。

そんなことがあってからのち、明はときどき父のそばで、貝の手入れや整理などの手つだいもするようになった。

部屋いっぱいの貝たちにかこまれながらすわっていると、遠い波の音が聞こえて、ひんやりとした青白い海の底にいるような気持ちがしてくる。

父は首をかしげてつぶやく。

「これだけあっても、もうひとつ、ここにほしい貝があるんじゃ。どうしても手に入れることができない貝がある――」

それは父の口ぐせなので、

――また火の色の貝のことか――

と、明も思う。

その貝は、とおい太古のころから、いまも海のどこかに生きつづけているという貝、オキナエビス――

「オキナエビスも数種類ある。ベニオキナエビスだけならうちにもあるが――」

父の居間のとくべつの箱にはいっている巻貝。

「オキナエビスは、一億五千万年前に生きていた貝。その種族が二十世紀の今も変わらず生きのびていることがわかって、世界じゅうでめずらしがられている貝じゃ」

ラセン型の黄色い巻貝。生きている化石といわれる、その貝を見つめていると、遠いはるかな太古の世界が明の目にも浮かんでくる。

ゴーゴーと鳴りながら、まっ赤な火をはいている大きな火山。古世代の地球の上。

流れていく風、きり、雨。見わたすかぎりただ黒ぐろとひろがっている土と岩ばかりの陸地。うごめくもの、生きているもののけはいはひとつもない——

その陸のむこうに光るひろい水。海の中には、動いているもの、生まれているものがある。水の底に、ゆらゆらゆれる長い植物。ばけものの花のような大きなウミユリ。そのそばを、のそり、のそりとはっていく岩のような大きな巻貝。

——貝の先祖のオキナエビス。

その上にまた流れていく雨、風、きり。まわりつづける月と太陽

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com